

右大臣と左大臣

—— 中京大本・麦生本・阿里莫本における夕霧の官位表記をめぐって ——

藤 井 日出子

中京大学図書館は『源氏物語』『若菜上・若菜下・橋姫・総角・早蕨』の五冊を所蔵する。この中京大学図書館蔵『源氏物語』（以下中京大本と称する）は、天理大学図書館に所蔵される『源氏物語』（以下それぞれ麦生本・阿里莫本と称する）と一致する本文が多く、別本の中でも「同系統」であるとされている。これまで中京大本及び麦生本・阿里莫本の異同を網羅的に比較する研究がなされてきたが、三本の関係についてはいまだ不明な点が多い。

藤本孝一氏は、「透過光」の手法を用いて、大島本の改変過程を明らかにされた。³⁾ その成果をもとに前稿では、大島本が夕霧の官位に「左大臣」とある「左」の部分を「右」に改変していることを論じた。⁴⁾ こうした意図的に行われた改変は、誤読や目移りなどによって意図せずに変った本文の変化とは区別して考察する必要がある。本稿では、夕霧の官位に着目して、この三本の関係について考察を加えたい。

—

阿里莫本は「紅梅」以降の巻が揃っているが、中京大本・麦生本には欠巻がある。そこで「紅梅」以降の巻について、現存する巻には「」、夕霧の官位が表記されている巻には「」を付し、「」の箇所について、夕霧の官位の異同を検討する。⁵⁾

	紅梅	竹河	橋姫	椎本	総角	早蕨	宿木	東屋	浮舟	蜻蛉	手習	夢浮橋	計
中京大本													3
麦生本													8
阿里莫本													12

夕霧の官位が記された箇所について、夕霧が「右大臣」であるか「左大臣」であるかを表で示す。漢字・仮名の別、「大臣」「大殿」「お

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	番号	大成
																				巻	
総角	総角	総角	総角	椎本	竹河	竹河	竹河	竹河	竹河	竹河	竹河	竹河	竹河	竹河	竹河	竹河	紅梅	紅梅	紅梅	頁・行	大島本
一六四八・1	一六四二・14	一六三六・1	一六三四・8	一五四七・6	一五〇〇・10	一五〇〇・1	一四九七・6	一四九二・8	一四九一・11	一四八九・10	一四八八・4	一四八三・9	一四六七・8	一四六七・2	一四六五・5	一四六四・3	一四五六・7	一四五二・12	一四四八・9	前	後
左	左	左	左	右	左	左	左	右	右	右	右	右	右	右	右	右	左	右	右	前	後
																					肖柏本
左	左	左	左	右	左	左	左	右	右	右	右	右	右	右	右	右	左	右	右		日大本
右	右	右	右	右	左	左	左	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右		大島本(河)
右	右	右	右	左	左	左	左	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	前	阿里莫本
/	右	右	右	左	左	左	左	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	後	麦生本
/	/	/	/	左	左	左	左	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右		中京大本
/	右	右	右	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/		

と「」などの表記の相違に関わらず、「右大臣」は「右」、「左大臣」は「左」とする。「右」「左」の表記を欠く箇所は「」、欠巻などでその部分を欠く箇所は「/」を付した。加筆のある箇所は前後を区別した。参考のために大島本・肖柏本・日大本・河内本の大島本（以下河内本と称す）の四本を加え、一覧の便を考慮して「大成」の頁・行を記した。

阿里莫本は、21（総角）では「右の大将殿」、26（宿木）では「右大将殿」とするが、本文の内容から21・26ともに夕霧をさしていることが明らかである。そこでこの二箇所とも「右大臣」として扱う。また阿里莫本は、39（蜻蛉）では本文は「右」であるが、「左」と書入れがある。内容的には「左大臣」とあるべき箇所であるが、ここではもとの状態を示す本文の「右」に従う。

この表から、中京大本・麦生本・阿里莫本の三本（以後三本と称す）

41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21
手習	手習	蜻蛉	蜻蛉	蜻蛉	浮舟	浮舟	浮舟	東屋	東屋	宿木	宿木	宿木	宿木	宿木	宿木	宿木	宿木	早藤	総角	
二〇四四・4	二〇二六・4	一九七六・9	一九七〇・3	一九六六・10	一八六九・13	一八七一・3	一八六六・7	一八二三・1	一八〇六・8	一七八〇・8	一七七七・4	一七七三・2	一七七〇・11	一七七〇・4	一七二〇・7	一七一七・6	一七〇八・2	一七〇五・11	一六九一・5	一六五一・14
左	左	左	左	左	/	/	/	左	左	左	左	左	左	右	左	左	左	左	左	左
右	右	右	右	右	/	/	/	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右		
左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	右	左	左	左	左	左	左
右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右
右	右	右	右	右	右	右	右	右	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	右	右
左	左	右	左	左	左	左	左	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右	右
/	/	右	左	左	右	右	右	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	右	/
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	右	右

における夕霧の官位は、「浮舟」を除いて一致し、他の四本とは異なることが分かる。三本がこれまで別本とされてきたことも首肯される。そこで三本について詳しく検討しよう。

「紅梅」以降における夕霧の官位を概観する。三本において夕霧の官位は、「紅梅」から「右大臣」で始まり、「竹河」巻末に「左大臣」に昇進する。その後「椎本」までは「左大臣」であるが、「総角」から「早蕨・宿木・東屋」まで降格記事がないにもかかわらず「右大臣」とされ、昇進記事がないにもかかわらず「蜻蛉」以降は再び「左大臣」とされる。これらの巻を、次の四項に分けて検討する。

ア 「紅梅」から「椎本」

イ 「総角」から「東屋」

ウ 「蜻蛉」から「手習」

エ 「浮舟」

ア 「紅梅」から「椎本」

「竹河」巻末には「右（大臣）は左（大臣）」とする夕霧の昇進記事がある。三本は昇進記事まで夕霧を「右」大臣、以後「椎本」まで「左」大臣とする。三本における夕霧の官位は本文の内容に一致しているが、他の諸本とは異なっている。この部分の夕霧の官位に着目すると、三本が独自の本文であることが分かる。三本は薫の昇進について、「竹河」巻末に「此ほか中将は中納言に」とする他の諸本には見られない独自の記事³⁹を載せる。この記事では「中将」とされる人物を特定できない。しかし「椎本」に「宰相中将その秋の比中納言に成給ぬ」とする記事があることから、ここで薫が「中納言」に昇進し

たことが判明する。三本は夕霧の官位のみならず、薫の昇進記事においても、他の諸本とは大きく異なっているのである。

イ 「総角」から「東屋」

この部分では、三本は一貫して夕霧を「右」大臣とする。この部分を「右」とする本文は他の諸本にも見られる。日大本などを始めとして諸本が三本と同様にこの部分を「右」大臣としている。一方、大島本・肖柏本・書陵部本など「左」大臣とする本文も多く、本文が「右」「左」に分かれる部分である。この部分を検討することにより、三本と他の諸本との関係を考察することができよう。このことは諸本の関係を検討する際の手掛かりとなる。注目すべき部分である。

ウ 「蜻蛉」から「手習」

この部分では三本は再び夕霧を「左」大臣とするが、他の諸本においても、「左」大臣とする本文が見られる。ところが三本はこの39（蜻蛉）のみ「右の大殿」としている。ここは明らかに夕霧をさしていることから「左」大臣とすべき箇所である。この「蜻蛉・手習」の部分について、夕霧を「左」大臣とする本文は、大島本・肖柏本・書陵部本にも見られる。これらは39のみならず「蜻蛉・手習」全てが「左」大臣である。しかるに三本は39のみを「右」大臣とし、「左」大臣とする本文と矛盾している。この矛盾した表記が三本にのみ見られることから、三本が独自の本文であることが分かる。なお既に述べたように、本文の内容に矛盾する39の「右」に阿里莫本には「左」と傍書がある。39に「左」と注記されていることは、阿里莫本の性格を考察するうえで注視される。

工 「浮舟」

「浮舟」の巻は、現存する麦生本と阿里莫本とで夕霧の官位表記が異なる。すなわち阿里莫本は34・35・36の三箇所とも「左」大臣、麦生本は34・35の二箇所を「右」大臣、36を「右大将」とする。三本における夕霧の官位表記が相違するのはこの部分の三箇所のみである。この巻については、夕霧の官位以外の要素も加えて改めて検討したい。

二

これまで検討したことから、中京大本・麦生本・阿里莫本の三本は、相互にきわめて近い関係にあり、他の諸本とは大きく異なっているといえよう。また夕霧の官位ではないが、三本のみが一致する箇所が「総角」に見られる。麦生本はこの巻を欠く。現存する中京大本・阿里莫本ともに20における夕霧の官位を欠くが、この部分の官位を欠くのはこの二本のみである。さらにこの二本はともに、20を含む前後の本文を『大成』で九行分（一六四七・12から一六四八・6）欠くが、この欠落部分もこの二本のみに見られる。この他にも、他の諸本には見られない欠落箇所が中京大本・麦生本・阿里莫本に散見する¹⁰⁾。このように三本のみが一致して欠落している箇所があることから、この三本は他の諸本とは異なる本文であるといえよう。

注

(1) 中京大学図書館蔵国書善本解題（中京大学図書館 一九九五・3）。

- (2) 岡島偉久子氏「中京大学図書館蔵『源氏物語』について——麦生本・阿里莫本との関係——」（『中京大学図書館学紀要』第13号 一九九二・3）など。
- (3) 「大島本の写本的性質」（『源氏物語千年のかがやき』国文学研究資料館編 立川移転記念特別展示図録 思文閣 一九九・10）。
- (4) 「右大臣と左大臣——大島本における夕霧の官位表記をめぐって——」（『国際教養学部論叢』第1巻 第2号 中京大学国際教養学部 二〇〇九・3）。
- (5) 27（宿木）について、『弄花抄』・『細流抄』（『源氏物語古注集成』）はそれぞれ「竹河昇進のことくならは右大臣は紅梅也不然右大臣誰共なし可案云々」・「紅梅大臣なるへし竹河の昇進にみえたり」として夕霧とは別人としている。そのため本稿では検討対象から外す。
- (6) 大島本は藤本孝一氏の調査に基づき、前後を区別した、肖柏本は天理大学図書館蔵本・日大本は「日本大学蔵源氏物語」（八木書店）・河内本は中京大学図書館蔵本による。同本については前掲注（1）に詳しい。なお日大本は²³（宿木）は「左」に「右イ」とある。
- (7) 21（総角）で阿里莫本は「右の大将殿わたりの事大宮も」とする。また²⁶（宿木）で「右大将殿には六条院のひんかしのおとみかきしつらひてかきりなくよろつとへてまち聞え給」とする。
- (8) 阿里莫本は、「右大臣」を「右の大井殿」あるいは「右大井殿」と表記する箇所が多い。また「大将殿」の「将」の文字は殆どの場合楷書で記されている。しかるに21・26の「将」の字は草体で記されている。あるいは「井」の草体が「将」と紛れたのであろうか。
- (9) 「竹河」巻末の「左は右に」の部分に諸本の異同はないが、「此ほか中将は」の部分には保坂本が一致し、他の諸本には「この薫中将は」、「椎本」の「宰相中将その秋の比中納言に成給ぬ」の部分に諸本の異同はない。
- (10) 中京大本・麦生本・阿里莫本の三本が一致して欠落する箇所については別稿に譲る。